

後期無文土器 こうきむもんどき — 隈・西小田遺跡出土例から —

隈・西小田遺跡で朝鮮半島（以下、朝鮮）系の無文土器が3点ほど出土しています。無文土器は朝鮮で農業が始まった時代（無文土器時代あるいは青銅器時代）の土器で、早期・前期・中期・後期に分類されます。そして、日本列島（以下、日本）から出土したこの系統の土器を、私たちは朝鮮系無文土器と呼びます。

今回は、隈・西小田遺跡の朝鮮系無文土器のうち、第5地点138号ピットから出土した、もっとも明確な後期無文土器をとりあげます（図1）。この土器は小形の甕で、弥生土器とは全体の形や作りがまったく異なります。底は突き出た円板底で、口のところに断面円形の粘土帯を貼りつけ、回転台は用いずに指ナデや押さえでつくるために凹凸が著しくてハケ目はみられず、胴部にはうすく長く重ねた粘土帯のつぎ目が明瞭で、後期無文土器の甕を忠実に再現しています。

朝鮮の後期無文土器の甕は、口に貼りつけた粘土帯の断面が円形の水石里式（前半）と（図2）、三角形の勒島式（後半）にわかれ、本例は水石里式に属します。



図1 朝鮮系の後期無文土器
（隈・西小田遺跡出土）



図2 水石里式の後期無土器
（伝忠清南道懷徳出土）

朝鮮系の後期無文土器が、はじめてまとまって確認されたのは、1974年の福岡市博多区諸岡遺跡の発掘でした。ここでは搬入品あるいは忠実に再現された水石里式の無文土器が、集落の一角に設けられた弥生時代前期末の土坑18基のうち12基から、50点以上も出土しました（図3）。この地区で発見された弥生土器はわずか30点で無文土器より少なく、無文土器は主要な器種がそろうこと、しかし石器はほとんど無く、土坑に焼土はあるが短期間にほぼ同時に使われたことなどから、無文土器人の集団が一時的に居住した遺跡とみられます。

また、佐賀県土生遺跡では弥生前期末から中期前半にかけて無文土器人の集団が長期居住した結果、朝鮮の無文土器の特色はもちながらも、そのものではない土器（擬無文土器）がたくさん見つかっています。

弥生時代の前期末～中期前半には、北部九州の各地に「国」という政治組織ができ、朝鮮系の青銅器（多鈕細文鏡や細形の銅剣・銅矛・銅戈）をもつ首長層があらわれ、やがて

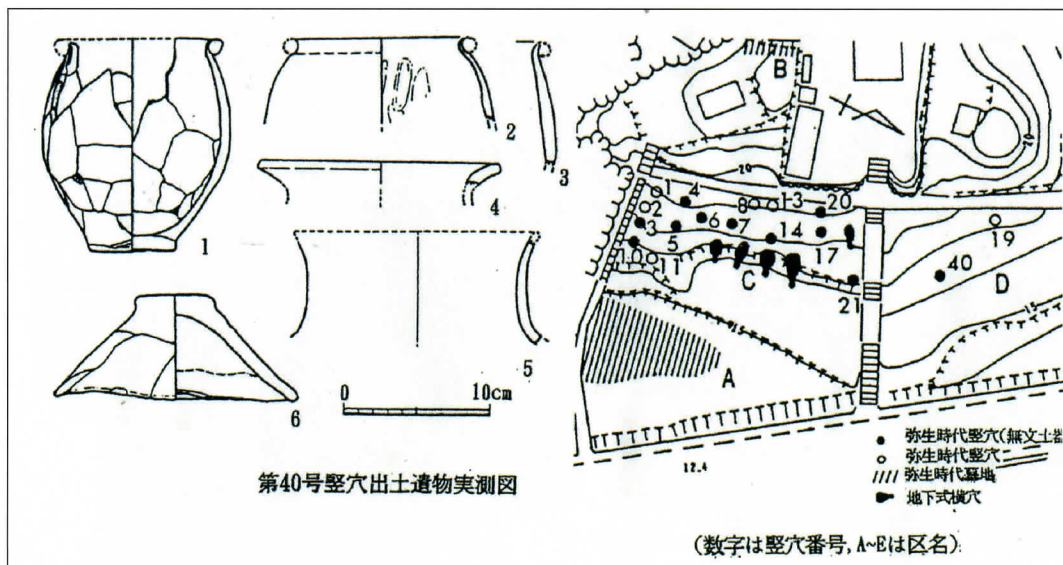


図3 諸岡遺跡の無文土器出土地区（右）と出土土器（左、1～6のうち4のみ弥生土器）

青銅武器もつくりはじめます。そうした青銅器やそこに込められた権威を得るためには、こうした無文土器人の集団が必要だったのでしょう。

ただし、面白いことに、土生遺跡でも初期の段階や諸岡遺跡では金属器をつくったことを示す炉や滓、送风管の口、鋳型などは見つかりません。これは隈・西小田遺跡の隣りの小郡市三国丘陵遺跡群でも同様です。そして青銅器の鋳造に関係する資料は、次の時期（中期前半）に擬文土器とともに現れます。

朝鮮でもいま発掘がさかんですが、後期無文土器とともに鋳型が出た例はまだありませんから、青銅器をつくった人々は、きわめて

限られた集落の限られた人々でした。したがって、弥生前期末に日本に来た無文土器人は青銅器をつくれなかった、そういう技術は持たなかったのです。そして、こうした人々が拠点集落に配置され、朝鮮との交流の回路を確保して交渉を重ねる中で、はじめて青銅器工人を獲得できたのです。

いっぽう弥生前期末から中期後半には、九州の対岸、朝鮮の慶尚南道地域にも、この時期の弥生土器を出す遺跡がいくつかあります。とくに三千浦市勸島遺跡では、弥生中期初頭～前半の搬入・忠実再現品や擬弥生土器（図4）がまとまって出ており（全体の土器のうち7～8%ほど）、弥生人が長期間集住し、じっさいに九州と朝鮮南部が相互交流したことを示します。

それでは、隈・西小田遺跡の場合はどう考えたら良いのでしょうか。少数ですが忠実再現品で、時期はおそらく弥生前期末～中期初ですから、直接にせよ間接にせよ、朝鮮南部とここが細々ながらつながっていたことを示します。そして、こうしたつながりの継続によって、中期前半の第3地点109号甕棺に副葬された細形銅剣を入手できたと言えます。

（武末純一）



図4 勸島遺跡の擬弥生土器（城ノ越～須玖Ⅰ式系）